

ロバート・ウォーレスの『人口論』と『諸特徴』との関連について
——1745 年草稿を中心に——

関西学院大学研究員 中野 力

1. はじめに

ロバート・ウォーレス (Robert Wallace, 1697-1771) はキリスト教の説教を中心に著作活動を行ってきたが、ジャコバイトの乱の直前に「人口論草稿」¹を著してから、少しずつ政治・経済をあつかった作品が増えている。そのウォーレスの政治・経済を論じた作品の中でも今までとりわけ注目されてきたのが、『古代および現代の人類の数についての論考』²と『グレート・ブリテンの現在の政治的状況についての諸特徴』³の二冊である。『人口論』での主題である古代・現代優劣論争でウォーレスは古代の側にたち、古代の農業を中心とした簡素な社会を賛美し、現代の奢侈社会を批判している。しかしその一方で『諸特徴』では現代のブリテンの発展が商工業に負っていると主張し、『人口論』で批判していた奢侈の役割を認める見解を打ち出している。このような『人口論』と『諸特徴』の見解の相違がかつて提起された⁴。

ウォーレスの政治・経済論についての出版物はそれほど多くはないが、ウォーレスは積極的に著作活動を行っており、エディンバラ大学にはウォーレスの草稿が多々残されている。最近のウォーレス研究は特にウォーレスの草稿を使ってウォーレスの思想に迫ることを意図している⁵。そのウォーレスの草稿の中でも一際重要なものであるにも関わらず研究されなかったものが、45 年に著された「スコットランドのジャコバイト達への忠告。革命とプロテスタント系国王の確立とに黙従するよう彼らを説得するために提示された諸理由

¹ 'Dissertation on the numbers of mankind.' The first draft as read to the Philosophical Society, Edinburgh, Lord Morton's copy with the Bastille mark, 天羽康夫編、『高知論叢』、第 82 号、2005 年。

² *A Dissertation on the Numbers of Mankind, in Ancient and Modern Times*, 1753, Edinburgh, rep., Routledge Thoemmes, 以下『人口論』と略す。

³ *Characteristics of the Present Political State of Great Britain*, 1758, London, rep., Augustus M. Kelley, 1969, 以下『諸特徴』と略す。

⁴ 永井義雄『イギリス急進主義の研究』、御茶の水書房、1962 年と田中敏弘『社会科学者としてのヒューム』、未来社、1971 年を参照。

⁵ ウォーレスの草稿を積極的に紹介している主なものとして、Smith, N. 'Sexual Mores in the Eighteenth Century: Robert Wallace's "Of Venery"' *Journal of History of Ideas*, 39,3: 419-33, 1978. 天羽康夫「ロバート・ウォーレスとデイヴィッド・ヒューム——スコットランド啓蒙における古代近代論争」、『高知論叢』、第 73 号、2002 年。永井義雄『自由と調和を求めて』、ミネルヴァ書房、2000 年があり、ノラ・スミスは 'Of Venery' を天羽康夫は「人口論草稿」をそれぞれ転写編集している。

の中で、とりわけスコットランドが革命以後富を減じているのではなく、その当時に比べて現在豊かになっていることを証明する」⁶である。この草稿はタイトルが示すとおり 1745 年のジャコバイトの乱のおり、ジャコバイトを批判するためにウォーレスが作成したものであり、ジャコバイトの不平不満と考えられるものをウォーレスが考察し、彼らの見解がいかに不当なものであるかを述べ、名誉革命以後スコットランドは豊かになっており、今後もその豊かさを享受し続けるであろうと結論づけている。

ここでウォーレスが展開するのはスコットランドの豊かさが商工業にも負っているということである。これは明らかに『人口論』で展開された内容ではなく、『諸特徴』と類似している。「忠告」は『諸特徴』に比して十分に経済について展開されているわけではないけれども、それでも 58 年に著された『諸特徴』の萌芽を『人口論』以前の 45 年の草稿で見ることができることは注目すべき事であろう。本報告ではウォーレスの「忠告」を紹介することを意図し、そのことで『人口論』と『諸特徴』との関わり合いを展開してゆく。

2. 「忠告」

ウォーレスは 1764 年にこの草稿を見直し、本論の前に文章を追記している。

「1764 年 11 月 1 日木曜日

これは優れたパンフレットであり、1745 年の反乱の直後に作成され、かつて出版する意図があったにもかかわらず、出版されなかったものである。

いくらかの見解はこの草稿から抜粋され、著者の作品である『ダン卿の著作に際しての従順な服従』⁷ (*Passive obedience on occasion of Lord Dun's book*) と『グレート・ブリテンの状態についての諸特徴』 (*Characteristics on the state of Great Britain*) に挿入された⁸。しかし、これら 2 つの作品に挿入されたものに加えて、この草稿はスコッ

⁶ 'An address to the Jacobites in Scotland. In which among other reasons offered to perswade them to acquiesce in the Revolution and the Settlement of the Crown In the Protestant line It is proved that Scotland has not declined in wealth since the Revolution but is richer att present than att that period.' Edinburgh University Library, MSS. La. II. 97/5, 以下「忠告」と略す。

⁷ *The doctrine of passive obedience and non-resistance considered, with some observations on the necessity and advantages of the Revolution in the year 1688*, by Mr. Wallace, one of the ministers of Edinburgh, published on occasion of Lord Dun's friendly and familiar advices, 1754 を指すと思われる。この作品については永井義雄『自由と調和を求めて』(171-175 頁)を参照。

⁸ 「忠告」と『諸特徴』には似た内容は存在するが、全く同じ文章は存在しない。一番類似している文は以下のものである。

'For in so far as poverty and begging arise from sloth and idleness it is natural to conceive that in a greater number of inhabitants there should be a proportionally greater number of poor people and beggars.' ('An address', p.82)

'In so far as poverty flows from sloth and idleness, it is natural to conceive, that, in a greater number of people, there should be propotionably a greater number of beggars.'

トランドの状態とスコットランドのジャコバイト主義についていくらかの優れた考察を含んでいる」(‘An address’, p.1⁹)。

このようにウォーレスが「忠告」を出版する意図を 45 年当時に持っていたにも関わらず「忠告」は出版されなかったのであるが、それでもウォーレスは「忠告」を優れたものであると自分で認めており、そして『従順な服従と無抵抗の理論の考察』と『諸特徴』との関連を述べている。また同時にウォーレスはこの作品を生涯眠らせておくのではなく、このパンフレットのいくらかの箇所が変更され、出版されるときが来るかもしれないということを述べている。

次のページでは以下の文章を付している。

「1764 年 11 月？日金曜日

特にグレート・ブリテンと関連を持つ、貿易、製造業、農業、そして商業についてのいくらかの論考は、どのような国内政策が一国の富と住民を増加させるのに最善であるかを示しているので、これらの論考はこれらの論題を考察する人々にとって、また私がこれらの論題についての見解を要約することがあれば、私にとってさえも有用なものであるだろう」(‘An address’, p.2)。

ここでウォーレスは「どのような国内政策が一国の富と住民を増加させるのに最善であるか」と述べているように、富と同時に人口に重点を置いていることを示している。そしてまたその富はこの草稿では農業だけに依存するのではなく、商工業にもその役割が認められている。また同ページにウォーレスは「忠告」が『人口論』と関連を持っていることも述べている。

このようにウォーレスがこの「忠告」と『人口論』と『諸特徴』との関連を明示していることと、53 年の『人口論』以前に、商工業の役割を認める草稿を著していたことは注目に値する。しかし、『人口論』と『諸特徴』の関係は、実際の所ウォーレスがこのように述べているだけで、内容から『人口論』と『諸特徴』を矛盾なく解釈することは困難である。

ウォーレスが「忠告」を著したのは、ジャコバイトの不満が不当であること、またそれとともに名誉革命体制の擁護を論じるためである。ウォーレスはジャコバイト主義を以下にまとめている。

1. 僭称者は無効に出来ない世襲によって国王の称号を手に入れていること。
2. 後継者争いから生じる紛争を妨げるために、血筋の継承に固執することが最善であること。
3. 故ジェームズ王の過ちが誇張され、革命による災いは彼が統治を行っていたよりも酷いものであったということ。

(*Characteristics*, p.124)

⁹ ページ数にかんしてはエディンバラ大学から送られた草稿 93 の枚数をページ数とする。

4. スコットランドでは尊厳、国力、富が衰えており、スコットランドの尊厳を取り戻すには、ステュアート朝を復興させるのが必要であること。('An address', pp.8-12)。

ウォーレスは4項目にまとめているが、最初の3項目が王位後継についての問題であり、最後の1つがスコットランドの状況となる。それゆえここでも後継者問題を先に考察した後、次にスコットランドの状態を考察する。

ウォーレスにとって統治は国民のために存在するものであって王のために存在するのではないゆえに、王が国民を圧制にさらすとき国民は決して王に服従する必要はなく、王に對抗してもよく、よって王の血筋の後継に固執する必要性もなかった。だからといってウォーレスは王への抵抗を全面的に擁護するのではない。王への抵抗は国を疲弊させ、王への抵抗が必要でないときでも生じることもありえる。それゆえウォーレスは王への抵抗それ自体には消極的な賛成の立場を取るが、それでも名誉革命は必要であったと考える¹⁰。それはステュアート朝がカトリックを信奉しているからであった。ウォーレスにとってはその1点だけでもジャコバイト批判、名誉革命体制擁護を支持する理由となった。

次にジャコバイトが主張するスコットランドの衰退という現状に対して、ウォーレスは反論を行う。ジャコバイトの主張によると、現在のスコットランドは衰えており、この衰退を打破できるのはステュアート朝の復興において他にないということである。このスコットランドの停滞という問題がジャコバイト主義と密接に結びついてきた。それゆえウォーレスはジャコバイト主義に反論するためにも、現在のスコットランドは衰えていないし、今後も発展し続けると主張する。

最初にウォーレスが説くのがイングランドとスコットランドの合邦の有用性である。ジャコバイトはこの合邦がイングランドにのみ利益をもたらし、スコットランドには不利益となったこと、また実質イングランドの傘下に入ったことで、スコットランドの尊厳が損なわれたことを主張する。それに対してウォーレスが述べるのが、財産と生命の安全が増したこと、そしてプロテスタントが保護されたことの重要性である。確かにイングランドとの合邦は全ての面で有利にことが運んだわけではないが、しかしそれ以上の利益をスコットランドは得てきたとウォーレスは考える。

このようにウォーレスはイングランドとの合邦が有用であつと考え、そしてまたそのことはスコットランドの経済的発展にも寄与するものであつたと見なしている。

ウォーレスが国の豊かさの一つの指標と考えるのがここでも人口である。具体的な数値をウォーレスは述べてはいないが、スコットランドでの人口増加を明白なものと考えていた。このスコットランドでの人口増加が革命以前に比べて富と生活資料が増加している証拠となるとウォーレスは見なす。このような人口増加と生活資料を関連づけるのは『人口

¹⁰ 抵抗の消極的賛成という見解は『従順な服従と無抵抗の理論の考察』にも見て取れる。永井（(2000), 173頁）を参照。

論』のウォーレスを感じさせるが、それと同時に重要なのは「忠告」で、ウォーレスは富の源泉として労働（labour）を重んじ、その役立つ労働を決して農業のみに限定せず、商業にもその役割を認めていることである。

3. 『人口論』

『人口論』では周知のようにウォーレスは古代側にたって現代の奢侈を批判し、奢侈を奨励する商工業を批判する。最も人口が多かった時代はギリシア・ローマ時代と考え、ウォーレスはいわばこの時代を多少の問題を抱えているとはいえ理想的な時代と見なしている。『人口論』ではその思想がほぼ貫かれているので、『諸特徴』と「忠告」と繋がるものを見つけることは難しい。しかし『人口論』でも若干ながらブリテンの豊かさについてウォーレスは述べている¹¹。

「私が言いたいのはほかでもない、この国〔ブリテン〕の現在の幸福な政治体制を、想像力で叙述しうる最も完全な政治体制と取り替えることは、狂気の沙汰であるということだけである。」（*Numbers*, p.106）。

「もしカエサルとアグリコラが、かつては取るに足らず軽蔑されていたブリテンが、今や平和な場所、自由の所在地となっているのを見たとすれば、どれほど驚いたことであろうか。〔彼らはいうであろう、〕なんと幸せな島であろうか。農業に精を出し、製造業（arts）で繁栄し、商業で豊かになっている島よ。」（*Numbers*, p.79, 傍点は引用者の強調）。

ここでもウォーレスはブリテンを称賛しているが、その根拠として農業と共に製造業と商業にも言及している。ウォーレスの『人口論』は農業を中心とした古代を称賛したものであるが、決して現代の商業を全面批判しているわけではない。ウォーレスとて製造業と商業がもたらす豊かさに気がついていて、しかし、古代と現代とを比較したとき、古代の簡素な社会のほうが優れているとウォーレスには感じられたのであろう。ウォーレスの見解は『人口論』だけを見ても必ずしも整合しないと思われるところがあり、その見解を完全に解釈することは難しいが、それでも『人口論』の中にブリテンの統治が優れていること、またブリテンの繁栄が農業と共に製造業や商業に帰せられるとウォーレスが述べていることは、「忠告」や『諸特徴』と比較するとき大きな意味を持つに違いない。

4. 『諸特徴』

「忠告」と内容が似ているのは『人口論』ではなく『諸特徴』であることは少し考察すれば判明する。前述のように「忠告」はジャコバイトの見解に対してウォーレスが反論を行ったものであり、それは主として二つの理由からであった。一つが王位後継の正当性に

¹¹ 天羽も『『古代と近代の人口』におけるブリテンの現状に対する評価は、ジャコバイトの乱の直前に報告された「人口論草稿」よりもはるかに高くなる。』（(2002), 320 頁）と述べ、『人口論』でのウォーレスのブリテンの高評価に着目している。

ついて、もう一つが、スコットランドが豊かになっているかどうかである。この章でも同様の順で『諸特徴』で述べているウォーレスの見解を考察する。

ここでもウォーレスはステュアート家の王位継承を正当化する人たちに対して名誉革命の必要を述べ、その必要性をプロテスタントの保護に見いだしている。ウォーレスはたとえステュアート家の継承者が正統な国王だとしても、ステュアート家はカトリックを信奉しているゆえに、それに抵抗することが正しいと主張し、またジャコバイトは合邦解消を主張するゆえに、ウォーレスはイングランドとの合邦がどれだけスコットランド人の生命や財産の安全、そして富の面で貢献しているかを強調したのである。

次にウォーレスの経済論であるが、『諸特徴』の元来の目的は、七年戦争の最中、ブリテンがフランスに圧倒されているのを危惧して、ブリテンがいかに豊かであるかを主張し、国民を鼓舞することであった。そしてウォーレスはブリテンとフランスを比較して、ブリテンが名誉革命以後豊かになっていること、これからもその豊かさを享受し続けると主張する。ここでもブリテンを豊かにしているのは農業と共に商工業である。これは紛れもなく「忠告」と同様の見解である。

5. 最後に

ウォーレスの主要著作である53年の『人口論』と58年の『諸特徴』という2著作に関しては、農業を重視し商工業を批判する『人口論』、逆に商工業を重視する『諸特徴』という区別が行われ、ウォーレスの矛盾が主張されてきた。確かにこの二つを何ら問題なく解釈することは困難なことである。しかし、45年の「忠告」には、革命以後スコットランドが豊かになっており、商工業がそのことに貢献していることを認めるウォーレスの見解がすでに表明されている。このことからたとえウォーレスが『人口論』で農業を中心とした古代の統治を称賛したにせよ、現代の商工業の役割を完全否定したことにはならないであろう。この点で『人口論』でもブリテンの豊かさが農業と共に商業にも帰せられていることは注目に値する。

確かに「忠告」は『諸特徴』に比べると断片的である。ウォーレスはヒューム達と触れ、彼らの著作に影響を受けることで自分の見解を発展させていったに違いない。しかし、ウォーレスの思想の源はすでに45年の「忠告」に見て取れる。この「忠告」は『人口論』と『諸特徴』の見解の差異をウォーレスが矛盾と見なしていなかった証拠となる作品であり、また後のウォーレスの政治・経済論の原点としても重要な意味を持つ作品である。